

2022（R4）年度 都内私立高入試の概況

株式会社創育／新教育

1. 募集校数と募集人員

① 募集校数と共学化

2022（令和4）年度の都内私立高入試では**豊島岡女子学園**が高校募集を停止したため、外部募集校は前年度より1校少ない182校になりました。

星美学園が女子校から共学に改編、校名を「**サレジアン国際学園**」に変更しました。

② 募集人員

男女校別の募集校数と募集人員は次の通りです。

表1 男女校別募集校数と募集人員

区分	2022年度		2021年度		増減	
	学校数	募集人員	学校数	募集人員	学校数	募集人員
男子校	18校	2,641人	18校	2,705人	±0	-64
女子校	44	7,631	46	8,071	-2	-440
男女校	120	26,993	119	27,161	+1	-168
計	182	37,265人	183	37,937人	-1	-672

③ 入試区分別募集状況

推薦入試は前年度より1校減の167校で実施しました。

推薦枠の全体に占める割合は前年度から変わらず**44.0%**でした。

表2 入試区分別募集状況

区分	推薦入試		一般入試		計	
	学校数	募集人員	学校数	募集人員	学校数	募集人員
男子校	13	1,004	18	1,637	18	2,641
女子校	44	3,580	44	4,051	44	7,631
男女校	110	11,814	120	15,179	120	26,993
計	167	16,398	182	20,867	182	37,265
%	91.8	44.0	100.0	56.0	-	-

④ 学科別募集人員

学科別の募集人員は次の通りです。

表3 学科別募集人員 構成比は全体の募集数に対するもの

区分	普通科	専門学科	内訳				
			商業系	工業系	看護系	家政系	その他
男子校	2,641	0	0	0	0	0	0
女子校	6,948	683	280	0	35	78	290
男女校	25,613	1,380	200	625	0	40	515
計	35,202	2,063	480	625	35	118	805
構成比	94.5	5.5	1.3	1.7	0.1	0.3	2.2

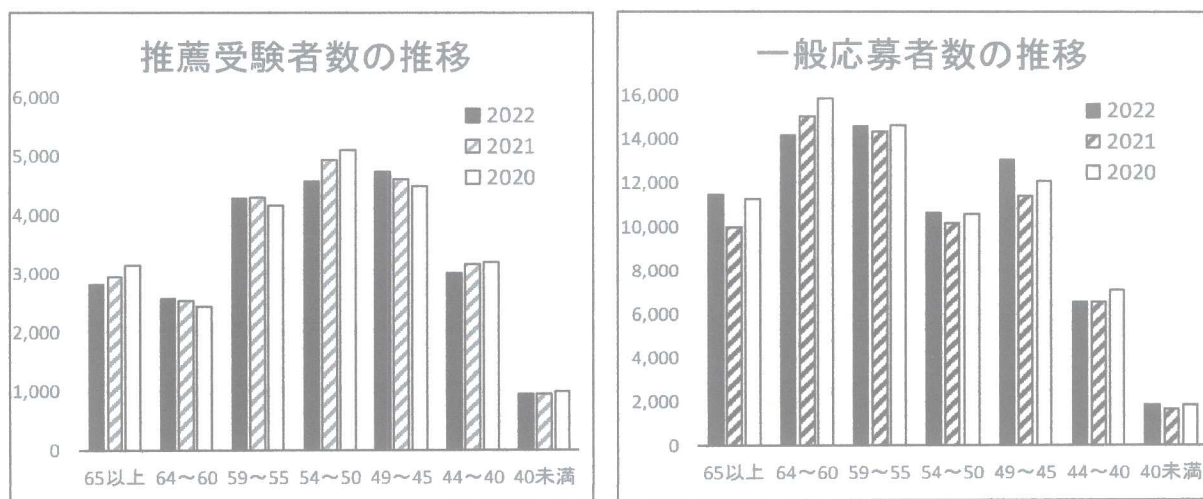
学力別推薦・一般応募状況

次のグラフは、新教育調査による学力偏差値別の応募状況を推薦、一般入試に分けて集計したものです。

これを見ると、推薦、一般ともに前年度比で増加している学力層と減少している学力層が交互に並んでいる箇所が多く、全体として前年度からの動きは大きくなかったと言えます。

ただし、都内公立中学校等の卒業予定者が前年度より3,400人以上多い中であって、推薦入試の受験者数は減少している学力層が多く、集計できた範囲においては全体で500人以上減っています。前年度はコロナ禍によって受験勉強が十分でなく、5教科課せられる都立高入試を敬遠して内申重視の推薦入試に向かったのではないかと思われる動きがありました。今年度はそのような不安がある程度緩和されたのか、都立の特に偏差値50台の層で一般入試の倍率が大きく上がっており、私立の推薦入試を避けて都立との併願を選択した受験生がやや増えたものと思われます。

一方、一般入試では65以上の層の応募者数が増加しています。前年度は移動による感染リスクを考慮して受験校を絞る動きがあり、不合格となる可能性が高い上位校は敬遠されていました。今年度は引き続きコロナ禍にあるものの、ことさら移動を控えようとする人は減り、学力上位校の応募者数につながったと考えられます。これは学力上位層が「挑戦志向になった」というより「安全志向が緩和された」と表現した方が正確かもしれません。また、54～50、49～45の層で応募者数が増えているのは、都立の50台の一般応募者が増加したことにより、それよりも少し下の層の私立が安全な併願校として選ばれた結果ではなかろうかと考えられます。



2. 各校の選抜状況

① 国立大附属

国立大附属は前年度必ずしも安全志向で敬遠されたわけではありませんでした。今年度は応募者増となった学校が目立ちます。移動の機会が増えることを避ける人が減った結果、募集人員が少なく不合格になる可能性が高い国立大附属も選択肢に加えられるようになったのではないのでしょうか。

一人の受験生が注目を集めた筑波大学附属は男子が増、女子は減りました。男子は一年ごとに実質倍

率が上下する隔年現象が生じつつあります。女子は応募者増でしたが 33 人の棄権者が出ました。前年度 3 年ぶりに実質倍率 3 倍台となりましたが、2022 年度は再び 2 倍台に下がっており、同校としては低めの倍率で推移しています。

前年度 5 年ぶりに実質倍率アップとなった筑波大学附属駒場は応募減となったものの実質倍率 3 倍台を保ちました。2020 年度まで 3 年連続で 2 倍台となっていた状況から考えると高めにとどまったと言えます。

<国立大附属の応募者数>

学校名	性別	2020 年度	2021 年度	2022 年度
筑波大学附属	男子	405	341	418
	女子	191	213	222
筑波大学附属駒場	男子	143	176	165
お茶の水女子大学附	女子	298	381	440
東京学芸大学附属	男子	479	411	535
	女子	379	351	384
東京工業大科学技術	男女	455	251	355

お茶の水女子大学附属は 2 年連続の応募増となり、過去 5 年で最高の実質倍率となりました。

ここ数年上昇傾向にあった受験棄権率は 14.2→12.3%へと下がり、他校第一志望者の割合が減ったものと思われます。

東京学芸大学附属は近年応募者数が減少傾向にありましたが、今年度は大幅な応募者増となりました。毎年のように募集要項の変更を行っていたのが受験生から敬遠されていた一因かと思われますが、今年度大きな変更はなく、それが安心材料になったかと思われます。今年度は前年度から 20 人弱合格者を増やしました（男子の合格者 121→124 人、女子 100→116 人）。

東工大科学技術は 100 人以上の応募者増となりました。前年度の低倍率の反動があったものと思われます。ただし応募者数 355 人は過去 10 年で前年度に次いで少なく、緩やかな入試が続いています。東工大との高大連携特別入試が廃止になったことが思いのほか尾を引いているのかもしれない。2025 年度までに大岡山キャンパス（目黒区）へ移転予定であり、在学中に移転が行われることになる学年の入試に影響があるかと思われます。

② 都内私立高入試概況 1 難関進学校

男子、女子難関校の状況です。次ページの表は一般入試の応募者数を過去 4 年分掲載したものです。豊島岡女子学園の高校募集停止によって、都内の高校入試において大学附属校ではない私立難関女子高の選択肢は狭まりました。

前年度はこれらの学校でも敬遠傾向が見られましたが、今年度は 4 校中 3 校で応募者増となりました。

開成は前年度応募者数が 500 人を割り込み実質倍率は 2.62 倍という低倍率だった反動か、今年度は 70 人近く応募者が増え、実質倍率は 2.97 倍へと上がりました。桐朋も応募者数の減少傾向に歯止めがかかりました。前年度の 215 人から 25 人増の 240 人、実質倍率は 1.31 倍から 1.35 倍へとやや上がりました。

前年度、本郷の募集停止の影響を受けて応募増となっていた城北は 27 人の応募者減、都立の同レベル校の男子受検者が軒並み増えており、都立第一志望者が城北よりも堅実な併願校を選んだかもしれま

せん。合格者数 173 人は過去 5 年で最も少ない人数でした。このため実質倍率は 1.83 倍と、前年度に次ぐ高倍率でした。

前年度から 5 科型入試を導入した巢鴨は 5 科型入試の応募者が 246 人(前年度 178 人)に増えた一方、3 科型入試は 38 人(前年度 67 人)に減りました。3 科型入試は合格者 18 人で実質倍率 2.00 倍だったのに対し、5 科型入試は 172 人の合格者で実質倍率は 1.43 倍、5 科型には都立や国立大附属との併願者が多かったため合格者を多く出しているのではないかと考えられます。

<男子・女子難関進学校の一般応募者数>

学校名	2019	2020	2021	2022
開成	537	522	498	566
桐朋	256	246	215	240
城北	328	327	360	333
巢鴨	118	149	245	298
本郷	304	194	募集停止	-
豊島岡女子学園	420	427	385	募集停止
計	1,963	1,865	1,703	1,437

③ 都内私立高入試概況 2 大学附属校

では大学附属校の応募状況はどのように推移したのでしょうか。次ページの表は早慶 GMARCH の附属校の推薦受験者と一般応募者の推移を過去 4 年間分掲載したものです。推薦、一般ともに 10 校合わせた応募者は増加しました。前年度の安全志向によって敬遠され、低めの倍率になっていた各校で反動がありました。前々年度までの人数には届いておらず、やはり安全志向の緩和と呼ぶべき状況です。

青山学院は推薦入試 28 人減、一般入試が 60 人増で、推薦入試から一般入試にシフトしたような形になり、高い人気を維持しました。推薦、一般合わせた数は 1,261 人→1,296 人とやや増えています。新型コロナウイルスへの不安がやや緩和されているのか、通学電車が混雑する都心部の学校の応募者増は都立高でも見られました。

前年度 3 校ともに応募者減となっていた中央大学系の附属校は、中央大学杉並は推薦 11 人減、一般入試 3 人増と前年度並みにとどまったものの、中央大学附属の推薦が 45 人 17.2%増、一般 229 人 41.2%増、中央大学は推薦が 10 人 5.3%増、一般 131 人 19.2%増となりました。中央大学附属は前年度までの一般入試の実質倍率が男子 4.40→3.16→2.72 倍、女子 5.87→3.78→3.61 倍と低下傾向にあったため反動がありました。今年度の一般入試実質倍率は男子 3.96 倍、女子 4.49 倍にまで上がりました。

早稲田実業は今年度募集定員を減らしました(推薦 60→40 人、一般 120→80 人)。その結果、推薦は 16 人 16%増で実質倍率は前年度 1.67 倍から 2.37 倍へとアップ、一般は 80 人 9.5%の応募者減でしたが合格者数は前年度の 259 人から 182 人に減り、実質倍率は 3.07 倍から 3.89 倍に上がりました。

明治大学付属明治は推薦 11 人減、一般 24 人増で、青山学院同様推薦から一般へシフトする形でした。国際基督教大学は一般 32 人 12.7%増、学習院は一般 35 人 24.5%増のように、一般入試での応募増が目立ちました。学習院の棄権率は 25.5→28.0→27.5%とここ数年高めで推移していますが、今年度は併

願者の受験が少なかったのか合格者数を 25 人（前年度 34 人）に絞ったため、実質倍率は前年度の 3.03 倍から 5.16 倍へと大きく上がりました。

早稲田高等学院は一般が 341 人 22.6%の増になりました。前年度が過去 10 年最少の応募者数だったため、反動があった形で、前々年度並みに戻りました。

慶應義塾女子は推薦が 23 人の増、実質倍率 5.96 倍は 2014 年度に推薦の募集枠を 10 人から 20 人に拡大して以降の最高倍率です。一方、一般入試は前年度とほぼ同数でした。豊島岡女子学園の高校募集停止によって学力上位の女子が慶應女子に集まってくるのではないかと思われましたが、予想されたほどの増加にはなりません。都立の上位校でも女子の応募者数が減っていることから学力上位の女子が私立から都立へ流れたということではなく、都立志望者、私立志望者ともに安全志向が働いたと考えられます。

<難関大学附属校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
青山学院	228	220	273	245	909	1,020	988	1,048
中央大学杉並	324	407	356	324	974	1,115	948	951
中央大学附属	423	303	262	307	868	646	556	785
中央大学	202	245	187	197	692	872	681	812
早稲田実業	154	132	100	116	1,080	1,028	843	763
明治大学付属明治	116	101	113	95	779	581	557	581
国際基督教大学	—	—	—	—	416	286	252	284
早稲田大学高等学院	249	236	235	244	1,841	1,850	1,507	1,848
学習院	—	—	—	—	113	141	143	178
慶應義塾女子	119	113	120	143	490	471	454	455
計	1,815	1,757	1,638	1,671	8,162	8,010	6,929	7,705

次の表も都内の上位大学附属校の状況です。これら 10 校合わせた数でいうと推薦入試は前年度から 120 人減、一般入試の応募者は約 155 人増と、ここでも推薦から一般へシフトする傾向が見られました。

帝京大学高等学校は併願優遇制度において不合格者がでていたことが前年度の安全志向の受験生から敬遠されたのか、応募者減となっていました。今年度は安全志向が緩和されたためか 45 人 11.8% の応募者増となりました。明治大学付属中野八王子は推薦入試で 20 人 5.5%、一般入試で 7 人 1.6% の微減になりました。もともと毎年激戦が繰り返される学校ですが、ここ 2 年間はやや低めの倍率になっています。

法政大学は前年度推薦一般ともに実質倍率 4 倍台の激戦になった反動がありました。推薦は 31 人 18.3%、一般は 161 人 37.4%の減となりました。推薦は前々年度と同水準ですが、一般の 200 人台は過去 10 年で最低です。

<上位大学附属校の状況（1）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
帝京大学	—	—	—	—	517	475	382	427
明治大学付属中野八王子	372	417	362	342	449	553	445	438
法政大学	134	134	169	138	402	331	431	270
國學院久我山	39	45	65	42	305	293	296	271
成蹊	11	20	39	22	197	142	195	173
明治学院（推薦は応募数）	286	388	354	307	1,027	1,120	956	1,084
東京都市大学等々力	—	—	—	—	209	360	216	218
明治大学付属中野	20	19	24	29	1,056	1,158	935	987
芝浦工業大学附属	53	34	58	64	159	104	123	112
東京農業大学第一	92	103	87	94	544	661	596	750
計	1,007	1,160	1,158	1,038	4,865	5,197	4,575	4,730

國學院久我山は推薦 23 人 35.4%減、一般 25 人 8.4%減となりました。推薦一般ともに「出願時に文科系・理科系を選択」という条件をなくしましたが、応募者増にはつながりませんでした。

成蹊は推薦の募集数を約 10 人→約 15 人→約 20 人と 2 年連続で増やしました。その結果、今年度の推薦受験者は全員合格となりました。一般は 22 人 11.3%減、推薦枠の拡大に伴い一般の募集数は前年度の約 70 人から約 60 人に減っていましたが、103 人の合格者を出し、実質倍率は前年度の 2.02 倍から 1.61 倍へと下がりました。中央大学系などへの移動があったと思われます。

明治学院は推薦から一般へのシフトが見られました。推薦は 47 人 13.3%減、一般は 128 人 13.4%増でした。前年度は受験校を絞り込む動きがあったため一般入試 2 回目の応募者数が大幅に減少していましたが、今年度は前々年度に近い水準にまで回復しました。2022 年夏には新校舎が完成予定です。

明治大学付属中野は一般が 52 人 5.6%増でしたが、2 年連続で 1,000 人を割り込みました。安全志向が緩和しているが継続している今年度の全体的な状況がよく表れていると言えます。

さらに大学附属校の状況を見ていきます。以下の大学附属校の合計を見ると推薦がほぼ前年度と同数、一般が約 700 人減となっていますが、推薦入試のない桜美林が一般応募者数を 700 人以上減らしており、それ以外の各校では通常の動きの範囲内に収まっています。

その桜美林は、進学コースの募集数を 85 人から 50 人に減らし、併願優遇において 5 科か 9 科いずれかの基準を満たすこととしていた内申基準を、全コース 9 科 39 を満たしたうえで各コースの 5 科基準を満たすよう変更しました。その結果、併願優遇の応募者は男子が 334 人 57.3%減、女子は 371 人 45.1%減となりました。5 科基準が 25 の国公立コースや 24 の特別進学コースには大きな影響はなかったと思われませんが、5 科基準 22 の進学コースは 9 科 39 が特に男子にとって高いハードルとなり、応募者減につながったと考えられます。

拓殖大学第一は前年度、コロナ禍による特別措置として全員に内申加点 + 1 を行いました。今年度は「新型コロナウイルス感染症流行に伴う、様々な影響への配慮」と全員一律の加点ではない文言に改めましたが、多くの受験生が加点の対象になったことが予想され、その効果もあってか推薦 I 受験者 192

人は過去 10 年で最多です。明治学院東村山の一般は前年度が実質倍率 1.2 倍台の緩やかな入試になったことから 33 人 19.5%増となりました。東洋大学京北は高校募集の定員を 120 人から 150 人に戻しました。ただし前々年度は推薦 50 人、一般 100 人だったのを、今年度は推薦 30 人、一般 120 人としたところ、推薦は前年度から 29 人 25.9%減、一般は 76 人 20.3%増となりました。

<上位大学附属校の状況(2)>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
拓殖大学第一 (推薦は I のみ)	142	134	128	192	1,943	1,678	2,068	1,927
桜美林	—	—	—	—	1,509	1,542	1,544	825
明治学院東村山	61	67	60	73	202	226	169	202
東洋大学京北	184	165	112	83	343	646	374	450
駒澤大学	289	357	318	309	772	887	711	765
成城学園	47	44	55	35	151	147	148	122
東京電機大学	44	49	52	33	294	238	249	199
多摩大学目黒	88	58	69	80	602	302	319	343
専修大学附属	285	332	239	225	556	568	372	415
計	1,140	1,206	1,033	1,030	6,372	6,234	5,954	5,248

駒澤大学、専修大学附属は推薦から一般へシフトする動きがありました。専修大学附は一般併願優遇の内申基準を緩和したためですが、駒澤大学は基準を据え置いており、今年度の受験生の動向としてやや一般入試を目指す傾向があったことを示しています。成城学園の前年度の推薦は 3 年次か 2 年次いずれかで内申基準を満たしていれば可としていましたが、今年度は 2 年次の内申基準をなくし、3 年次の内申点のみ評価の対象となりました。その結果、推薦受験者は 20 人減り、5 年前の水準に戻りました。多摩大学目黒は推薦 11 人 15.9%、一般 24 人 7.5%の増となりました。英検準 2 級の加点幅を狭めました。品川翔英が大きく受験者数を減らした影響が及んだものと思われます。

次に日本大学系の高校を取り上げてみましょう。

大学が不祥事に揺れた今年度は、8 校合計の推薦受験者数、一般応募者数ともに過去 4 年間で最少となりました。学校ごとに見ると応募者増となっているところもあり、前年度の高倍率の反動もあったのでしょうか、不祥事の影響がなかったとは言えない状況です。

そんな中で推薦、一般入試ともに応募者の減少傾向が続いていた日本大学第一には一般の方に反動があって応募者増となりました。日本大学第二は推薦一般ともに減となったものの安定した状況が続いています。日本大学第三は一般入試における併願優遇制度を復活させ、内申基準を設けました。それが功を奏してか、一般応募者は 34 人 44.7%増となりましたが、前々年度までの応募状況には達していません。

日本大学櫻丘は推薦入試が 106 人 28.0%の減で、前々年度並みに戻りました。一般は 167 人 17.9%減、2 年連続で実質倍率が 2 倍を超えていたため敬遠されたものと思われます。日本大学鶴ヶ丘は推薦

が 62 人 22.2%，一般が 118 人 24.1%の減となりました。推薦Ⅱは 2 年連続で実質倍率 3 倍を超えていたため敬遠されたかと思われますが、推薦Ⅰも 30 人以上減っており、大学の不祥事の影響もあったかもしれません。日本大学豊山は前年度の高倍率の反動がありました。推薦は 181 人 42.0%，一般は 141 人 33.8%の減、実質倍率は推薦が 1.95 倍から 1.58 倍へ、一般は 3.25 倍から 1.97 倍へとそれぞれ下がりました。

日本大学豊山女子は面接のみだった推薦入試に 3 科の適性検査を加えました。それが敬遠されたのか推薦受験者は 102 人 38.4%減となりました。

目黒日本大学は募集数を前年度の 315 人から 245 人に減らし、特進クラス（2 学級）を廃止し選抜クラス（1 学級）を設置、選抜クラスの内申基準は N 進学クラスと揃え、加点の対象を狭めました。その結果、推薦は 53 人 23.8%，一般は 216 人 47.4%の大幅減となりました。新宿、目黒、雪谷等都立の一般入試応募者数が増えており、私立の推薦は避けられたものと思われます。一般は多摩大学目黒等に流れたと思われ、3 年連続で応募者減となりました。

<日本大学系の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
日本大学第一	124	108	89	70	187	170	136	174
日本大学第二	79	104	133	108	287	387	376	360
日本大学第三	73	86	82	82	150	130	76	110
日本大学櫻丘	236	252	379	273	487	1,021	931	764
日本大学鶴ヶ丘	234	261	279	217	535	525	490	372
日本大学豊山	262	278	431	250	341	290	417	276
日本大学豊山女子	225	239	293	191	65	96	81	82
目黒日本大学（日出）	190	218	223	170	526	478	456	240
計	1,423	1,546	1,909	1,361	2,578	3,097	2,963	2,378

④ 都内私立高入試概況 3 共学化

2022 年度は星美学園が校名を「サレジアン国際学園」に変更して女子校から共学校になりました。2023 年度には日本音楽が「品川国際学園」と校名変更し普通科を設置したうえで共学化、自由ヶ丘学園も共学化、2024 年度には現在男女別学での教育を行っている自由学園の高等部が共学化、さらに 2026 年度には日本学園が明治大学の系列校となり校名を「明治大学付属世田谷」に変更したうえで共学化する予定と、共学化の流れは止まっていません。今年度共学になった学校と、ここ数年で共学化した学校の入試状況を見ていきましょう。

サレジアン国際学園は共学化と同時にコースも「Ⅰ類」「Ⅱ類」から「本科」「グローバルスタディ」に改編、本科とグローバルスタディの内申基準を揃えました。その結果、推薦は本科 12 人、グローバルスタディ 15 人で前年度から倍増、一般も過去 5 年で最多の応募者数となりました。

八雲学園は前年度共学化とともに内申基準をアップしたところ推薦受験者が減ってしまいましたが、今年度は基準を据え置きで受験者増となりました。

共学化3年目の品川翔英は前年度に応募者が急増し定員の2倍を超える入学者を迎えたため、今年度は入学者数を抑える必要に迫られました。そこで総合進学コースの募集数を120人から80人に減らし、5科内基準を上げ、3科・9科の基準をなくし、加点を廃止しました。それだけではなく、募集要項に推薦一般ともに受験者数が定員を超えた場合、内申基準を満たしていても合格は確約しないと明記しました。その結果、推薦の受験者数は各コースとも定員内に収まり、一般の合格者数は定員の2倍以下となりました。なお、推薦、一般併願優遇で不合格者は出ませんでした。

同じく共学化3年目の武蔵野大学は共学化初年度の2020年度に高校募集人員250人を大幅に上回る400人以上の入学者を迎えたことから、翌年本科コースの基準をアップして応募者を減らしていました。今年度は各コースの基準を5科のみに絞り、ややハードルを上げましたが、推薦一般ともに増となりました。武蔵野大学附属千代田は共学化初年度の2019年度はLAコースとMSコースを女子のまま残し、2020年度に完全共学化した後、2021年度に「選抜探究」「附属進学」の2コースに集約しました。今年度は2コースとも内申基準を5科のみに絞ったうえに、附属進学の5科基準を推薦、一般ともに上げたところ、選抜探究、附属進学ともに大幅な応募者減となりました。

共学化4年目の明法は初年度の2019年度は入学者過多、そのため2年目は基準をアップし受験者数減、3年目は加点制度を拡充し得点加点の基準を緩和したところ推薦入試の受験者増で一般入試は減、そして今年度は特進コースの基準を「5科基準かつ英数4以上」から「5科基準かつ3科13」に変更、実質的な基準アップとなりました。その結果、推薦一般ともに特進コース減で総進コース増、受験者数は増えたが共学化1年目ほどではないというところに落ち着きました。

文化学園大学杉並は2018年度共学化と同時に基準緩和、2019年度は基準据え置き、2020年度基準アップ、2021年度基準緩和と試行錯誤を繰り返し、応募者数もアップダウンが激しくなっていました。今年度は特進コースに国公立クラスを設置、それ以外の基準は据え置きとしたところ、推薦は微減、一般は各コースとも応募者増となりました。

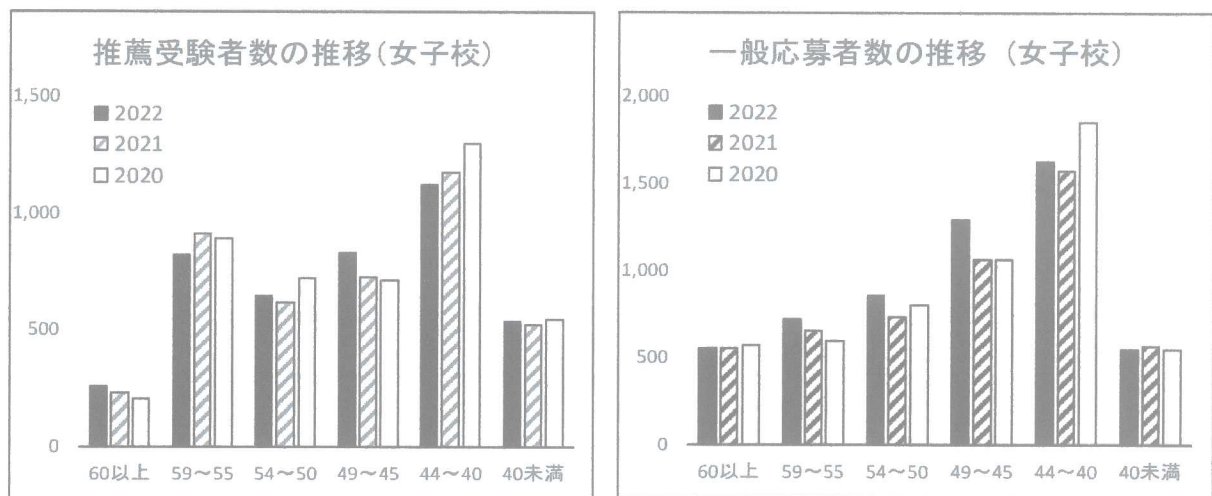
このように共学化により応募者数が急激に変動する学校が多く、内申基準等を試行錯誤して落ち着くまでは3、4年かそれ以上かかるようです。

<共学化した学校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
サレジオン国際学園(星美)	23	19	11	27	10	11	4	17
八雲学園	9	11	6	11	6	8	20	23
品川翔英	47	103	417	74	80	416	1,285	332
武蔵野大学	141	308	114	148	146	436	214	267
武蔵野大学附属千代田	68	205	121	41	84	193	167	67
明法	187	64	112	133	382	237	210	349
文化学園大学杉並	111	87	106	98	620	319	376	444

⑤ 都内私立高入試概況 4 女子校

2022年度都立高校入試では、男女別定員を設けている普通科全109校で男女別定員緩和措置を実施し（前年度42校）、女子の合格者数が定員よりも多くなる都立高が多数となりました。都教委では来年度以降、緩和措置の割合を10%から20%に拡大する段階を経て、完全な男女合同定員へと移行する予定であり、段階を進めるごとに女子の合格者が増える見通しとなっています。この都立高入試の制度変更が私立女子高の入試状況にどのような影響を与えたのか見ていこうと思います。



まず推薦から見ていくと、概ね2ページに掲載した都内私立高全体の状況と大差ありませんが、49~45の層の伸びがやや大きくなっています。都立高普通科では40台前半の学校において男子の倍率は若干上がっていたのに対し、女子の倍率は下がっており、内申点を持った女子が偏差値的には一つ上の層の私立の推薦に流れた動きが想定されます。また、私立高全体では推薦受験者が減っていたのに対し、女子高全体ではわずかに増えています。そして都立の一般入試では、男女別定員普通科の女子の倍率がやや下がっています。したがって、男女別定員緩和措置の実施校拡大によって、ことさら女子が私立推薦入試を避けて積極的に都立一般入試を選択するような動きは起こらず、学力検査に自信を持っていない層の女子はむしろ私立推薦入試へ向かったと言えます。とはいえ、生徒数の増加数に対して私立女子校推薦受験者の増加数は微々たるものであり、推薦から一般入試へシフトする動きは女子校も例外ではなく、その動きが全体と比べると緩やかだったという程度です。

一般入試の応募者数を見ると、ほとんどの学力層で応募者増となっています。その最大の原因は生徒数自体の増加であろうと考えられますが、特に中堅層においては募集停止や共学化によって選択肢が狭まっている中であっても、あえて女子校を併願校として選択する女子が減っていないことがわかります。しかし、ある女子校からは「都立との併願受験者の歩留まり率が過去最低だった」との情報も得られており、都立の女子合格者増によって「併願校としての私立女子校の需要はなくなっていないが、入学者減によって苦境に立たされる」という状況が発生している可能性があります。各校の入学者数の情報は現時点で得られていませんが、それによって都立高入試の男女合同定員への移行の時期が変わってくるものと思われます。

都内私立高入試概況 4 進学校

<進学校の状況 (23 区) >

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
錦城学園	212	240	95	121	549	496	182	245
東洋	448	581	517	256	835	1,026	914	497
青稜	—	—	—	—	1,039	866	1,417	983
朋優学院	135	76	133	178	2,661	1,929	2,249	3,215
駒場学園	87	151	141	111	1,061	1,671	1,180	1,246
目黒学院 (共学部)	89	91	68	89	794	788	493	919
駒込	390	506	485	473	634	698	636	615
SDH 昭和第一	246	195	158	158	747	712	617	634
東亜学園	149	88	154	142	696	552	579	464
実践学園	130	130	130	151	492	367	396	473
杉並学院	94	130	105	110	1,212	1,232	843	988
豊島学院	128	152	173	197	806	735	889	1,010
豊南	115	154	195	206	741	771	738	842
関東第一	731	804	638	682	1,617	1,533	1,388	1,669

次に進学校の状況を見てみましょう。まず 23 区の学校です。

錦城学園は前年度内申基準アップで推薦、一般入試ともに大幅減となっていました。今年度は募集数増で内申基準は変えず、推薦一般ともに増となりました。東洋は総進を募集停止し、特選と特進の募集数を増やしたうえ、両コースの基準を上げました。その結果、推薦、一般ともにほぼ半減しました。青稜は前年度併願優遇を書類選考に変更し応募者が大幅に増加していましたが、今年度は学力検査に戻しました。英検準一級、一級を加点項目に加えましたが、応募者減となりました。朋優学院への流れもあったかもしれません。

その朋優学院は新設した国公立 TG コースに 1,100 人以上の応募者を集めました。国公立 TG は一般入試のみの 5 科型で、合格者数は 79 人、実質倍率は 12 倍を超えました。既存の特進コース、国公立コースだけでも一般で 2 年連続の 2,000 人超え、推薦は国公立が基準を上げて受験者減でしたが、特進は倍増しました。駒場学園は推薦から一般へシフトする動きがありました。推薦は 30 人 21.3%減、一般は 66 人 5.6%増でした。目黒学院はスーパープレミアムの推薦基準アップ、アドバンスとスタンダードの併願優遇基準を緩和した結果、一般は 400 人以上の応募増、入試日は違うものの品川翔英の応募減が影響したかもしれません。駒込は推薦 I で特 S の 9 科基準をアップ、推薦 II および併願優遇から 3 科の選択肢をなくしましたが、推薦一般ともに微減で留まっています。SDH 昭和第一は一般が微増となりました。文京区では公立中学校卒業予定者数が前年度より 20%近く増えており、その影響もあったかと思われます。東亜学園は特進の基準を上げ加点項目に漢検と数検を加えました。その結果、特進の一般は 33 人 31.6%減でしたが、基準を据え置いた総合選抜の一般も 82 人 17.0%減となりました。前年度基準を上げて応募者増となっていた実践学園は、今年度は基準を据え置き、さらに応募者増となりました。女子の応募者が特に増えているようです。

杉並学院は総合進学併願優遇3科の内申基準への加点が可能になりました。特進は応募者減となったものの、総合進学は200人近い増となりました。豊島学院は各コースとも推薦の基準を上げ、スーパー特進以外の加点上限を上げたところ、推薦、一般ともに増となりました。豊南は選抜コースの併願優遇9科の基準を上げ、5科の基準を下げたところ、選抜の一般応募者が40人増となったほか、他のコースでも応募者増となりました。関東第一は推薦44人6.9%、一般281人20.2%増となりました。

次に多摩地区です。

八王子学園八王子は前年度より400人以上多い応募者となりました。八王子実践は総合進学の推薦の5科基準をアップ、推薦60人、一般約200人の減となっています。昭和第一学園は工学科を募集停止、総合進学コースを「文理進学」と「探究」に分け、「探究」の内申基準は前年度までの総合進学より低く設定しました。その結果、総合進学の一般応募者は前年度より680人もの増となりました。八王子実践からの流れもあったかと思われます。錦城は今年度2/12に特進コース志望者のみの第2回一般入試を実施しました。その結果、特進は応募者増、進学は減となりました。

<進学校の状況（多摩地区）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2019	2020	2021	2022	2019	2020	2021	2022
八王子学園八王子	—	—	—	—	1,455	1,344	1,104	1,544
八王子実践	118	185	171	111	1,594	2,219	1,717	1,504
昭和第一学園（普）	155	157	190	190	1,848	1,726	1,995	2,736
聖徳学園	22	25	35	32	320	302	318	473
錦城	154	208	160	153	1,182	1,276	1,208	1,196
大成	220	213	237	215	856	831	851	803

3. 入試トピックス

地区	学校名	内容
品川区	日本音楽	2023年度より男女共学化、校名を「品川国際学園」に変更、普通科を設置
目黒区	自由ヶ丘学園	2023年度より共学化
世田谷区	大東学園	2023年度より福祉コース募集停止
中野区	新渡戸文化	2023年度よりスポーツコース募集停止